

遠泳に挑戦！ 全員が完泳

生徒が主体的にとりくむ水泳合宿

森 下一期



はじめに

和光中学新任の先生たちとの最初の活動は、よく、館山水泳合宿のことになります。「全員が三キロや六キロも完泳すると聞きましたが、本当ですか？」と。中には「ちょっとまゆつばものではないかなあ」などという人もいます。たしかに、結果だけを聞くなうらそうといった驚るぎと、感想が生まれるのは無理からぬところかもしれません。

和光中学の夏季水泳合宿は、二十数年の伝統をもち、そのとりくみの重点は時期時期によって違いはあれ、「三キロ、六キロの遠泳を完泳する」という目標は、一貫して追求されてきました。そのすべてにわたって紹介することは、紙数の関係から言っても、私はここ一〇年ほどしか和光中

に在職していないといったことからとても無理なことです。したがって、ある一時期のとりくみを中心に、筆を進めてみようと思います。

一 和光中学生にとっての館山水泳合宿

「館山を経験しなければ和光中学生ではない」と教師も言い、生徒も言います。卒業文集を、特定の題をつけずにつくると、ほぼ全員が何らかの形で館山合宿にふれていきます。その中でも半数以上はその合宿を中心に書くというほど、ひとりひとりの心の中に深く焼きついています。卒業してから、水泳指導のコーチとして声がかかるかどうか気がなりません。

在校生は、合宿が行なわれる七月二〇日過ぎからの一週

間（五泊六日）を前にして、一ヵ月から一ヵ月前前になると、あわただしく準備をはじめます。プールができてから

きっています（自分が泳げたのが、整然と隊列を組んだ集団の力であることを自覚して、集団の力と素晴らしさを一年

間（五泊六日）を前にして、一カ月から一カ月半前になると、あわただしく準備をはじめます。プールができてからは（昭和四六年）、体育の授業での水泳が、館山気分をより強く出していきますが、組織づくりがまずはじまりです。一〇名前後の一年から三年までの縦割り班をつくり、合宿での生活はその班を単位に行ないます（なお、これまでは一学年は二学級以内で来て、今年の一年生がはじめて三学級となった小規模学校です）。それらの生活班の班長は、班長会をもち、生活総務が指導します。一方、水泳に関する部分、食事、レクリエーション、保健等は、水泳の級班からリーダー、係が選ばれ、各総務が指導します。総務は総務会をもち、全体の指導は生活総務（全体総務と呼ぶこともあります）が行なうという組織形態で、各総務レベルへの指導は教師がタッチしますが、ほとんど生徒が運営していきます。

一年生は、クラスの仲間とはなれ、上級生と生活することになるため、事前の班会においても緊張の連続です。上級生は上級生で、下級生を指導しなければならず、初めて館山を経験する一年生に何を教えるべきかと気をひきしめてのぞみます。

一年生は、縦割りの生活もさることながら、三キロメートルも海で泳ぐことに不安と恐れを持っています。上級生は（近年は、一年のときに、八〇〜九〇％が三キロを泳ぎ

きっています）自分が泳げたのが、整然と隊列を組んだ集団の力であることを自覚して、集団の力と素晴らしさを一年生に教えようとしています。

このように、生活も遠泳も集団としてとりくむことにより、不可能とも思える距離を泳ぎきり、その喜びと、集団に対する理解を持つ場となっているのです。

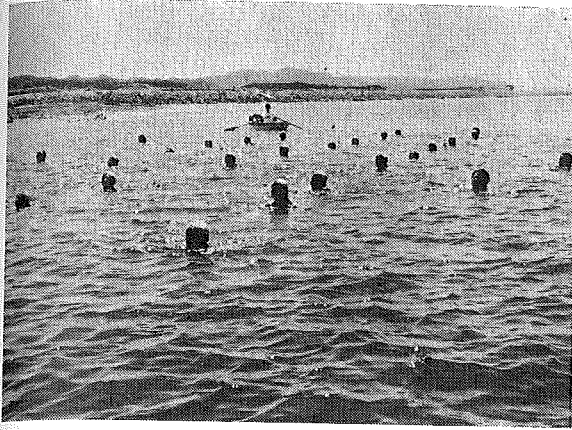
二 全員完泳を可能とする水泳指導

水泳は集団的にとりくめば泳げるようになるわけでないのは当然です。一方で、水泳指導が合理的なものになっていて、子どもに泳力をつけなければ駄目です。和光中では、館山合宿がはじまるの前後して学校体育研究同志会の指導を一貫して受けてきました。ドル平泳法、近代泳法の指導法を直接うけてきたことが、ここ数年、卒業までに、ドクターストップのかかった子ども以外、全員が少なくとも三キロの遠泳を完泳するところまで行き得たものとなるどころです。

また、この間、無事故（病院にかつぎ込むということはありません）でこれたのは、練習のときも、遠泳の際にも、学校体育研究同志会の指導者、大学の水泳部コーチ、卒業生コーチ助手の多数の指導を得て、常に安全性を配慮してきたからと言えます。

たとえば、昨年の場合ですと、遠泳者二〇〇名に対し、

指導者（指揮、側泳、ボート、医師）は七六名に及び、生徒二三人に一人がつくといった程度です。このように体制を組むのは、天候、水温の関係で、万一の場合は、全員を気動船や岸に上げることと考えての上です。これまでも途中で中止させざるを得ないことがありましたが、まるでピストン輸送するように、足などのつった子どもをボートにひき上げ、気動船に運んだこともありま



水泳指導の体制に若干ふれておきたいと思えます。指導は、泳力に応じた、六段階の級別で行ないます。一級は六キロ遠泳完泳者のみがその資格を得、六級は、カナズチ・ほとんど泳げない者が属します。新一年生は三分の一以上が六級に属しま

すが、現在では、体育の水泳の授業の中で、大半が昇級して、合宿の場ではかなり少なくなりました。

呼吸法から入るドル平泳法はほとんどの子どもにもマスターされ、昇級資格としての五〇メートル（海では一〇〇メートル）を泳ぎきって五級へ進みます。しかし、合宿が終っても六級に残る子どもが一、二名います。体が堅く、水をこわがってできない子ども、できるくせに、ちよつと水を飲んだ、鼻に水が入ったと言ってはすぐ立ってしまふ子どもなど、上級生になっても六級にとどまってしまうのです。そのような子どもたちは、次年度になっても昇級は遅く、次々と下級生に迫り越され、とり残されていく結果となります。

五級に上った子どもたちは、現在では、バタフライ、クロールなどの近代泳法も学び、平泳ぎを学んで、それぞれがある程度泳げるようになって四級に昇級し、そこで泳ぎ込み、三キロ遠泳参加資格のある三級に昇級します。

一夏で、六級から三級まで進む子どもがかなりの数にのぼります。しかし、すべてが順調に進むのではなく、先きに述べたような子ども、館山三日目までは六級で足踏みしていて翌日一日で、トントン拍子に進級する子どもなども、一様ではありません。（なお、技術指導に関しては、本誌の「教材づくり、私のくふう」を御参照下さい）

三 館山を自分たちの手でつくり

ました。当時和光中の生徒会活動、学級活動が、新しい芽を持ちつつも、低迷期にありました。学級の舌功は、

三 館山を自分たちの手でつくろう

——リーダーも自分たちで選ぶ子どもたち

このように展開される館山水泳合宿は、ほっておいて順調に進むわけではありません。確かに、二十数年の伝統的な行事であり、縦割りの生活班で一年から三年まで常に参加しているの、子どもたちは自己運動を起し、教師が特別教えなくても身につけていく部分は非常にたくさんあります。それが常にベースになっていると言って良いでしょう。

しかし、毎年同じ目標をもって、同じようにとりくむ行事であるため、マンネリ化もしてきます。泳げる子どもはごく当然のように泳ぐことを考え、泳げない子どもは、イヤな合宿だと思いついてしまふことにもなります。組織的にも、パターンがきままっているため、時に形式化することもあります。

私が在職している間に、この延々と続いている合宿に、二回の大きな改革が行なわれました。どちらも生徒が主体的にこの合宿をうけとめ、集団化をはかっていくことを目指して行なわれたのですが、どちらも館山合宿の蓄積の中でではじめて行ない得る、より高いものを求めて、追求されたものと考えています。

前の方のとりくみは、昭和四五年度を境にして行なわれ

ました。当時和光中の生徒会活動、学級活動が、新しい芽を持ちつつも、低迷期にありました。学級の活動は、それぞれには意欲的なとりくみは見られても、相互につながりがなく、生徒会の活動とも切り離れ、生徒会は、行事を一応そつなくやるのがせい一杯といった状態で、中学生の中に生氣が見られないといった感を与えていました。

一つのきっかけは、教師の夏の合宿で、子どもたちの状況を分析する中で、館山で現われた状況に関してです。

これまで、和光中学最大の行事である館山の組織では、教師はリーダー育成の重要な場として、班長、総務の決定に関与してきました。形態としては、生徒会執行部と合議したり、任命をしたりしてきましたが、職員会議で各学級の状況もふまえ、誰をリーダーにすべきか真剣に検討をしてきました。

その時の教師の意識の中には、これだけの大きな行事をやるには、一定の力がある者がリーダーにならねばやり切れないという考えが根強くある一方、和光中学最大の行事である館山のリーダーに選ばれることは、すべての子どもが望んでおり、任命されるのは名誉なことだと思っただけであると考えていたのです。

それに対し、その年水泳総務に任命された生徒が、「何で私がやらなきゃならないのか、イヤだ」と言っていたことが問題になったわけです。当人が本当にそう思っていた

か、まわりに対するジェスチャーとして、言っていたのかは不明ですが、いずれにせよ、館山合宿が子どもたちに主体化されていないのではないか、という問題意識を強く持たされたわけです。

もちろんそれだけでなく、その頃、どこかしまらない合宿となっていたことに對する不安があり、それと重なって、大きく教師たちをとらえることとなったのです。

そこで、結論的に生まれた方向は、子どもたちの手にゆだねていこう、子どもたち自身の手でつくらせてみようということでした。すなわち、これまで教師も関与していた館山のリーダー決定を子どもたちの選挙による決定に移していく方向を追求することにしたのです。現在、選挙で行なわれているところだと考えられるとおかしくもなりますが、具体的な場面では、相当時間をかけて議論をしました。選挙が行なわれる段階では、大きな不安をもって、指導の見通しを細かく検討したものです。

館山合宿に関して、『選挙制』を、考えたのですが、生徒指導全般にわたって『自主的、民主的な生徒集団』の育成をめざして、本腰を入れてとりくむことになったわけです。

生徒会は、『自分たちの生活は自分たちの手でつくりあげよう』をスローガンに、行事をふくめ、自分たちの生活をあらいなおし、与えられたものに従うのではなく、自分たちで一つ一つを確かめながら創造していくことをめざし

されてしまう程でした。すなわち、すべてのリーダーをはたして自分たちだけで選べるだろうか、という不安が強く



生徒が作った呼びかけポスター

はじめました。その中で、子どもたちにとって最も印象の強い館山合宿をも、自分たちの手でつくっていかうと考えるようになったのは当然でした。

とは言え、子どもたちがすぐそこに目が向いたわけ

ではありません。教師の手を借りなければ、とてもできないようなことではないという意識が深く底に流れており、自分たちの館山生活を指導するリーダーを自分たちで選挙して選ぶという道もあるのだということに気づいた時には、驚ろきと、不安が交差していました。たとえば、意を決して、教師にリーダーの決定権の委譲を要求すべく、生徒総会にかけた全面選挙制の要求の議案は、粉糾し、一度は流

し、方針である、自分たちの生活は自分たちの手でつくることに逸脱しないし、かなりの前進でもある」と考え、

されてしまう程でした。すなわち、すべてのリーダーをばたして自分たちだけで選べるだろうか、という不安が強くなり、要求をまとめることができなかつたのです。

生徒会執行部が提起した。「すべてのリーダーの選挙による決定」は、「館山も自分たちの生活だ。それをつくりあげる中心となるリーダーを自分たちで選ぶのは当然じゃないか」という考えを論拠に展開したのですが、生徒全員から、「水泳総務は私たちの命をもあずかるような仕事だ。そんなに重要な仕事をするリーダーを私たちが責任をもつて選ぶことができるだろうか」という意見が出されると、反論できないといった重さが館山合宿にはありました。

実は、教師の中でも、この部分について激しいやりとりがあったところ。もし、人気投票的にやられたとしたら、具体的な仕事内容をもつ水泳、食事、レク、保健の部分はとりかえしがつかなくなるのではないかと、といった危惧も強く出され、最終的には、今年は、班生活に関するリーダー（班長）のみの選挙制を認めていこうというところまで一致した部分です。

その後、生徒会執行部は、総会の雰囲気、討議内容を分析し、「全てのリーダーの選挙制」というところまでいかなくとも、全員が不安を感じている、具体的仕事をもった総務の選出は、今回はどうしても良いのではないかと。生活総務、班長を選挙制にすることなら、全員に納得させられる

し、方針である、自分たちの生活は自分たちの手でつくることに逸脱しないし、かなりの前進でもある」と考え、「全面選挙制」を「生活総務・班長の選挙制」の要求に修正して、提案しなめました。その趣旨の徹底のため、学級討議も要請し、やっとのことで、総会決定が得られるという状態であつたわけ。す。

その後は、学校への要求、回答という筋道をたどるのですが、それ以前から何回も職員会議で検討を重ねてきてはいても、「教師に拒否権があるか否か」の問題も新たに持ち上り、回答が簡単に出されたわけではありません。教師間でも意見がわかれたりしましたが、最終的には、館山準備のタイムリミットをひかえ「今年度に限り要求を認める。但し、教師は拒否権を留保する」といった内容で生徒会とも合意するところとなりました。

このように、ある部分で、教師と生徒の考えが期せずして一致していたことをどう考えるか、あるいは、教師に拒否権があるかどうか、といったことについて、検討すべき課題は多くありますが、ここではくわしくはふれられませんが。

このような過程を経てとりくまれたリーダー選挙は、従来になく熱のこもった立合演説会を生み出し、活発な選挙活動が展開されました。学級では、学級の館山へのとりくみとからめ、学級推薦の候補者を全力で応援していま

たちで一つ一つを確かめながら創造していくことをめざし

会にかけた全面選挙制の要求の議案は、粉砕し、一度は流

た。

一方で、人気投票にさせてはならない——教師の拒否権の問題はこのような部分にもひびいています——と、自分たちの班長を選ぶ責任が訴えられ、立候補するものの意気込み、投票するものの真剣さを見出すことができました。その結果は教師の不安をほとんど解消するものでした。

自から自覚し、支持を得てリーダーとなった子どもたちは、館山合宿に生気をとりもどし、水泳練習を支え、遠泳完泳を支える生活をひきしめ、より集団的なものに高め、盛り上げて行きました。もともと、その過程の中では、総務の罷面問題等も起り、単純に進んだわけではありません。

四 「全員完泳」をめざして

このときのとりくみは、このリーダー選出に関することだけではありません。それだけとしたならば、具体的な合宿での生活をつくり出し、遠泳を完泳することはできません。本当にひとりひとりに館山合宿の目標を自覚化させなければ、リーダーが右往左往するだけに終わってしまい、ます。目標を形式的にきめるのではなく、一人も残さず自分のものにするのが合宿を真に成功させるものであり、そしてこそ、集団の力と喜びを生み出すものです。

「全員遠泳を完泳しよう」という目標はおそらく館山発足当初からのものでしょうが、本当に一人も残さず全員が三キロを泳ぐことは望みたくも達成されないだろうという気持ち全体の中にそれとなくありました。

しかし、この年、ある学級がその目標に本気で挑戦しはじめたのです。ひとりひとりの泳ぎを相互に検討し、どんな練習をどのくらいやれば遠泳ができるか、具体的に検討し、その上で「全員泳ぐことはできるはずだ」という見通しをもって、「全員完泳」の目標を設定しました。そして、二ヶ月以上も前から、特訓を組んで行ったのです。朝、始業の前に集まり、ランニングや、縄とびを一斉に行ない、全校は、何ごとが起ったのかと驚ろくありさまでした。

この学級の具体的なとりくみを積み上げて目標をやり切るうという気迫は、全校をつつみ込むところとなりました。ともすると、目標は目標として、そこに近づくよう努力すれば良いだろうと、若干でも努力が見られたり、努力のふりが見られれば、到達しなくとも、まあまあ、で終りがちなのですが、ここでは、その努力の内容をも問題にし、達成可能と判断される目標を設定して、設定したからには、具体的な努力を要求するという本来の姿が目の前に示されたわけです。そして、この学級は卒業までに、とうとう館山始まっていらい初めてその目標を完全に達成しました。

「全員完泳」がスローガンではなく、現実のものであることが目の前に示されたことは、他の学級にも力を与えました。ある学級では、

五 新たな飛躍を

「全員完泳」がスローガンではなく、現実のものであることが目の前に示されたことは、他の学級にも力を与えた。ある学級では、この目標を設定するかどうかで、延々と学級討議を続けました。泳げない子どもは、自分の目標と考えたときに、どうしても賛成できません。たとえ泳げても、前年の苦しさを思い出すと、今年、さらに倍の距離を泳ぐことなど考えられないと本音を出してきます。まわりの子どもたちは、上級生が成し得たことなら、自分たちにもできないはずはないと説得にあたりますが、単なる精神主義では、足の立たない所で泳ぐ不安を消し去ることはできないのです。俺が教えてやる、事前にこんなとりくみをやるう、私も恐いけど一緒にやるう、といった、具体的な練習、経験上のことも出されることによって、目標決定にたどりつくことができました。最後の一人が決意するときには、全員が拍手で激励するなど、目標決定の段階から館山のとりくみは始まっています。そして、早朝トレーニング、日曜日には寒いときは屋内プールへ、学校のプールが始まればそこへ行って練習を重ね、この学級も卒業時には、目標を達成しました。

学級でのこのような館山合宿を主体的に受けとめる姿勢をつくり出すことが、生徒会の全校の館山へのとりくみとガッチリかみ合って、合宿全体を目標達成のある集団的なものにさせていくことができたと言えます。

五 新たな飛躍を

リーダーの選挙制は、次年度は総務にも拡大され、一方、全員遠泳完泳をはたす学級がつづく中で、この時間に得られた緊張と規律感ある集団の姿は、徐々に姿を消してきました。かつて、六キロを遠泳するものは英雄的な存在とも言えたのが、合理的な水泳指導法の一層の改善と子どもたちのとりくみにより、一年生で三キロを泳ぐのが当然となり、二年では六キロがあたりまえになる程泳力が高まってきたことが様子をかなり変えてきました。

だからといって、全員完泳が容易に達成されるわけではありません。最後の一人が泳ぎきるのは並大抵のことではないのです。ただ、集団の目標と個人の目標を一致させるといったときに、「全員完泳」だけでは不十分になってきたのです。一、二年はまだ一致するのですが、三年になると、そこが一致するのは、三キロ、六キロを泳いでいないほんのわずかの子どもだけとなり、多くの子どもは、合宿前のとりくみとか、リーダーとの中では一致させ得ても、合宿の場では、個人の目標を明確にはしてない状態となります。そのような部分が合宿の場ではみ出したり、全体に悪影響を与えるようになってきたのです。

ここ二、三年そういった問題意識を持つ中で、六キロをすでに泳いだ一級には、同じ六キロ遠泳の中に近代泳法を

折り込んでみるといった試みもしてみました。が、はっきりとした焦点が定まりませんでした。

そのような中で、次への課題——これまで多少話題になっていてもふみ切れなかった、これまでの館山の歴史からすれば画期的な——へ、昨年は思い切って進んだわけです。それは、六キロ遠泳者は指導者になるということですね。学級では、班学習などを組織し、教え合い、助け合うことを通して、わかる者は、教えることにより、よくわかっていくように、わからぬ者は、仲間を支えられてより努力をするようにと追求されているのだから、水泳に関しても出きるのではないかと考えたのです。もちろん、その背景には、体育の授業での班学習や、指導法の授業が十分に成立し、成果をあげてきていることがあります。それを、遠泳完泳を目標とする館山合宿に生かせるかどうかが課題でした。不安がないわけではありませんでした。しかし、二十数年積み上げてきた、この館山合宿をより高めていくには、その課題に挑戦する以外にはなかったのです。

組織形態もガラッとかわりました。総合班と遠泳班。前者は、六キロ完泳者の中から班長を選挙し、四級以下の子どもが班員となります。学校でのプール練習、館山での前半は、その班を単位に班長で水泳指導をします。これまで生活班と水泳練習の級と分離していたものを一体化し、生活も水泳練習も、ともに上級生が指導する体制としたわけ

です。後者は、六キロ遠泳を旨とする二級と三キロ遠泳の参加資格者である三級の子どもが縦割班をつくり、完泳を目標に練習をつづけます。

総合班においては、これまでと全く違う状態が生まれました。三年生は立派な指導者として下級生に着実に泳力をつけていきます。自ら歩んできた経験と学習をもとに、教師も出来ないような適切な言葉としぐさをもって確実に指導をし、宿に帰ってからも、昼の上で続けます。

自分の指導した下級生が昇級し、遠泳した時の喜びよりは、自分のより大きな目標をやり切った満足感にあふれていました。そこに、私たちはこれからの館山合宿の道を見たいと思いました。

二十数年の伝統の重みをもつ和光中学校の館山合宿は、どの時期をとらえてみても、和光中学の教育の集約の一つです。常に新しい課題をもって、他の教育的とりくみとからみ合って一歩ずつ前へ進んでいるのではないかと思えます。この小文では、その片鱗は示し得たかと思えますが、子どもたちが自分たちの手でつくり上げる館山合宿へ一歩一歩進んでいることを何とか読みとっていたらいいと思います。

(和光学園中等学校)